只見短歌会　八月詠草

大塚栄一　指導

思ひがけず体調崩しこの夏は暑中見舞の葉書も出さず　古川　英子

霜除けに抜きたる草を被せしを芋の芽伸びて乾かしくるる　小倉キミ子

曲る腰いたはりつつも鍬打ちて八十路の我は土に親しむ　馬場　八智

入院の母にその友も入院しベッド並べて話は尽きず　新国由紀子

朝取りのキャベツの上の雨蛙わが物顔に我を見上げる　渡部ゆき子

処暑なるも残暑厳しき日々にして涼しき風は肌を吹きゆく　関谷登美子

花期がきて根を分けやりし友人に礼言はれるも記憶の薄し　目黒　富子

早く起き物書きをれば群馬まで仕入れに行くと孫は声かく　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　九月例会

目黒十一　指導

何もかもつめ込んでいく冷蔵庫　都

夏川の川底ゆったりぞうりはく　修一

真っ白な雑巾おろし盆支度

蝉の声村に沸き立つ墓掃除

窓たたく闇をみつめる半夏雨　味代子

大花火ドンと腹打ち子に戻る　一穂

冷やし置く小玉西瓜や山清水

向日葵の中の一本向き替えて

台風の逸れる静けさ菜を刻む　礼

ここちよき朝風二百十日かな　吉児

点滴に遅速のありぬ秋の雲

外泊の眼に稲穂揺る風情

捨て畑に夕日のごとし赤南瓜　順子

火の匂い隣からくる門火かな　信

戸を開けて見上げる空や野分去り

虫の音を雑音というか外国人